

大穴周辺のおれぞれ49

吉橋大師講の女性先達 斉藤とよ

はじめに

大穴の「斉藤その女」は江戸時代末期に活躍した俳人として有名である。今回紹介するのは大正時代から昭和の中頃まで吉橋大師講の唯一の女性先達・視察として活躍された神保町の「斉藤とよ」(以下敬称略)のことである。

須賀神社は神保町の氏神様である。この境内にもう一つ神明神社(写真②)がある。入口も鳥居も須賀神社と別であり、神殿も立派で境内社とは違い独立社である。その鳥居の手前脇に立派な石碑(高さ150cm横幅70cm)が建っている。表面に「特等師範大権大教正 斉藤とよ子」と刻してある。(写真①)

裏面に「斉藤とよ」の経歴・業績と碑の寄進者名が記されている。

碑文の内容

碑は昭和29年の建立であり既に66年経過しているのだから昔むしで読みづらい部分もあったが、何回か確認に訪れて漸く解読できた。長文なので概略を紹介すると次の通りである。

「斉藤とよは宮本町の鳥光家の生まれで、2才の時に夏右工門家の養女となったが、小さい頃から宗教活動に熱心で部達の御堂に阿弥陀如来・釈迦如来の2体を寄付し生前に逆修法名(法観院蓮寿妙月大師)を贈られた。20才の頃より西国坂東秩父の霊場を隈なく巡り、昭和18年には同志5名で四国巡礼に出発した。その時戴いた十夜ヶ橋霊場の砂は地元有力者の協力を得て御堂に納めた。30才の時に吉橋大師講の礼所詠歌に身を投じ、北総連合支那の創立者の1人となった。吉橋大師講巡礼の時は百数十名の視察の中唯一の女性視察として活躍した。その春秋2回の通路には必ず接待をし、宿なき通路には善根宿を提供するなど功績は枚挙に遑がないほどである。その功績を永久に残すために同志にお願いして顕彰碑を建立した。

昭和二十九年十二月 発起者 鈴木恒藏 斉藤雍三 吉橋隆吉

斉藤夏右工門家

「斉藤とよ」の詳細を知るためにお家を訪ねる事にしたが、ご承知の通り近隣に斉藤姓は多い。たまたま須賀神社の近くにお住まいの斉藤さんとはある縁で顔見知りのためそこを訪ねて碑の文章を見せて尋ねた。冒頭の「夏右工門」を見てすぐに教えて貰った。神社前のバス通りを小室の方に少し行ったらお家であった。訪ねると立派なお家で表札にお二人の名があった。ご夫人と若夫人がおられて事情を話すときよく話して下さった。ご夫人が嫁いで来られたときは「斉藤とよ」(現在の当主のお祖母さん)の7回目の頃だったとこのことで、「なかなか元氣な人だったと聞いている」との話であった。戒名帳を見せて頂いたが、没年は昭和31年12月で享年65才であった。顕彰碑建立の2年後である。戒名は「法観院蓮寿妙月大師位」とあり、碑に書いてある逆修法名の「法観院蓮寿妙月大師位」と1字違いであるが大師講の先達なので大師がよく言い表しているようである。生年はご存じでなかったが、昭和31年没・享年65才から推定して明治24年(1891)のお生まれであろう。

編集後記

新型コロナウイルスの感染拡大が収まりまします。そのため、大穴連合会の三行事である夏祭り(盆踊り)、敬老会(大運動会)すべて中止と運動会をすべて中止し、その他の沢山のイベントも開催を差し控えています。この沢だよりは連合生活に制約を受けており「大穴だより」は連合会活動の記事にのみ紙面を構成していますが、これまで活動がすべて中止を構成していましたが、これら活動がすべて中止になり、令和3年の東京オリンピックを盛大に迎えられたため、7月発行予定であった「大穴だより」143号の発行を断念しました。この程、11月に大穴地区在住の皆様が船橋市表更なる感染防止に努めていきだいたいと思っております。(Y・K)

いずれにせよ20才頃(明治44年)より西国霊場(33観音) 坂東霊場(33観音) 秩父霊場(34観音)の計百観音を巡り、昭和18年(52才の頃)には四国八十八ヶ所札所巡りをしておられ相当な活躍ぶりである。

吉橋大師講とは

斉藤とよが30才で身を投じた吉橋大師講とは四国八十八ヶ所札所巡りを模したもので、八千代市貞福寺の住職が210年ほど前に開設したものが起源である。その後、江戸末期の頃に現在の吉橋大師と東葛印旛大師に分割再編され現在に到っている。吉橋88ヶ所札所は八千代市30ヶ所・船橋市47ヶ所・習志野市7ヶ所・鎌ヶ谷市2ヶ所・白井市2ヶ所と5市に跨がっている。海老ヶ作町公会館の傍に70番札所(香川県本山寺の模)の祠があるのは皆さんご承知の通りである。神保町の札所はバス停御堂前の墓地にある。56番札所で愛媛県泰山寺の模である。尚この祠の隣りに十夜ヶ橋霊場の祠がある。(写真③) 吉橋88ヶ所の中で十夜ヶ橋霊場の模があるのはここだけなのでかねて不思議に思っていたが、上記碑文の通り「斉藤とよが四国巡礼に行ったとき十夜ヶ橋霊場のお砂を頂いてきて御堂に納めた」とあり納得した次第であった。十夜ヶ橋霊場とは弘法大師が行脚の時一夜の宿がなく小川の土橋の下に野宿されたことによるもので四国別格霊場20番札所の8番札所である。

吉橋大師講は戦後も盛んに行われて春秋2回大勢の人が巡礼していたが、平成7年に休止となった。斉藤家のご夫人もその頃熱心に接待されていたことを懐かしそうに話して下さった。斉藤とよが亡くなった後も故人の奉仕の意思をきちんと引き継いでおられたのである。

碑建立の寄進者

公私に大活躍の「斉藤とよ」を顕彰のため碑が建立されたのであるが、これに対する寄進者も素晴らしいもので、千葉市の千葉寺を筆頭に総計78件の寄進者が名を連ねている。千葉寺は坂東33観音霊場29番、関東88ヶ所の45番の札所で有名な古刹である。

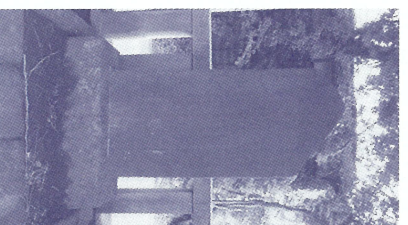
個人の方の寄進は70件で近隣の方は勿論市内各地のほか八千代市・柏市・白井市・習志野市・成田市と多方面に亘っている。その他八木ヶ谷支部・東京立石支部・行行林支部など吉橋大師講の6支部の名前もあり「斉藤とよ」が如何に大勢の方々に敬愛されていたかを物語っている。

終わりに

所属の船橋地名研究会で市内北部の案内を担当し、下調べなどで須賀神社を何度も訪ねる内にこの碑の存在を知った。大穴の近隣に大正から昭和の前半にこれだけ活躍した女性がおられたという事は素晴らしいものと思いは是非紹介したいと筆を執った次第である。多少調査不十分で舌足らずの箇所あるところがあるのはご了解願いたい。

(編集委員 横田)

参考図書・資料：八千代市郷土博物館「新四国を歩く」ウエキペディアによる各種データ



写真①



写真②



写真③ 十夜ヶ橋霊場の祠 (右) 左の祠は56番札所